

アーク・ブラッド

A.D.5000のアダム

榊 一郎

Ichiro Sakaki

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 倉嶋丈康

目次

序章 昔日夢

5

第一章 戦乙女

13

第二章 原種人類

77

第三章 未来社会

148

アーク・ブラッド設定資料

206

あとがき

211

序章 昔日夢

夏本番を間近に控えた七月の下旬。

日毎に白さを増す太陽は、街を鮮やかに照らし出していた。

初夏は生命の季節である。

特に、自然の多く残る地方都市ではそれが顕著だ。

少し辺りを見回すだけでも、街路樹が青々と生い茂り、葉を一杯に広げて空からの光と熱を受け止めている様子や、活発に青空を飛び回る鳥達の姿も見受けられる。動物も植物も——そして生き物ではない建物や、道路を行き交う電気自動車すらもが、補助電源用の光発電パネルにたっぷり日差しを浴び

て、潑刺としていくかのように見えた。

訳もなく、居ても立ってもいられなくなるような気分なのは、別に自分が高校生のもので、明日から夏休みだから、というだけでもないだろう——そんな事をふと峰部明久は思った。

明久にとっては、高校生になって初めての夏だ。

中高一貫教育の学校に通っているせいで、高校受験だの、卒業式だの、といった感慨深い出来事こそなかったものの……やはり肩書きが変わると、世界も変わって見えるから不思議である。

何より高校生は、アルバイトが出来る。

中学生の頃は校則で禁止されていたのだが、高校生になれば、学校に申告さえしておけば大抵のアルバイトの許可が下りる。明久も夏休みの余暇を活かして、何か社会経験を積んでおくつもりだった。

「さて……」

校門を出たところで明久はポケットから携帯端末を取り出した。

携帯端末は明久の手を——体温を赤外線で感知して休止状態から自動復帰。主の操作を待たず、これも明久の生活パターンから学習し推測して『求められているであろう』情報を画面の上に表示した。諸々のニュースが緩やかに画面の上を流れていく。ヴァーチャル・アイドルの歴史展・秋葉原にて今月十日から』

『フランスで初の商業核融合炉・稼働へ』

『九條大学テニス部・婦女暴行問題で学長辞任へ』

『南ヨーロッパ経済再生機構・ギリシャ経済への第三次介入を決定』

『新民党・幹事長の交代を示唆』

……等々。

毎度の如く世間は平常運転である。

欠伸混じりにそうしたニュースを流し見している

と——

「——兄さん」

聴き慣れた声が、明久を呼ぶ。

顔を上げた明久は、そこに一人の女生徒が歩み寄ってくるのを見た。

華奢な少女だ。

眼鏡を掛けているのと、長い黒髪を一部三つ編みにしているせいで、全体的に地味な印象になりがちだが——そうした部分を含めても、美人だと一目で分かる。何処か博多人形を想わせる清楚なその姿は、中等部の制服よりも、茶道部の部活でたまに着る和服の方がよく馴染んで見えた。

「——朱乃」

「お待たせ」

少女は微笑してそう言った。

峰部朱乃——明久の一つ違いの妹である。

明久は基本的に彼女と待ち合わせして二人で下校する。登校の時も同様だ。

これは兄妹仲が良いという事もあるが……朱乃は生まれつき身体が弱いという事が一番大きな理由である。彼女はたまに発作を起こして倒れたりする

事があるので、念のためにと、登下校時にはいつも明久が付き添^そっているのだ。

「ごめんなさい。ちょっと茶道部の方に呼ばれちゃって」

「いや、まあいいけど」

言って——明久はふと首を傾^{かじ}げる。

「引退したんじゃないっけ？」

「うん。でも日野^{ひの}さんも、引き継いだからってすぐに勝手が分かる訳じゃないし」

「そりゃそうか」

苦笑する明久。

朱乃は中等部の茶道部で部長をしていたが……夏休み前に、引き継ぎを済ませている。高等部にも茶道部はあるが、同じ学校内でも中等部のそれと高等部のそれは別扱いなので、一旦、朱乃は茶道部部長を引退した事になっているのだ。

「茶道部は朱乃が独裁^{どくさい}してたもんなあ」

「人聞きの悪い事言わないで」

と言いつつも朱乃は苦笑する。

自分でも多少の自覚はあるらしい。元々生真面目な性格の朱乃は、殆ど一人で茶道部の雑事を執^とり仕切^きっていたため——後輩^{こうはい}が後を継いでもすぐには代わりが務まらないのだろう。

「真面目なのは良いけどな」

朱乃と一緒に歩き出しながら明久は言った。

「朱乃の場合、生真面目すぎるっていうか……責任感が過剰^{かじょう}っていうか。何でもかんでも一人で背負い込んで片付けてしまおうとするのは、朱乃の悪い癖だと俺は思うけどな」

「別に背負い込んでるつもりはないんだけど……」

眼鏡の奥で眼を瞬^{しばた}かせて朱乃は首を傾げる。

「そう見える？」

「見える」

「うーん……」

眉^{まゆ}を顰^{ひそ}めて唸^{うな}る朱乃。

こんな登下校中の他愛^{たわい}ない会話で、いちいち真剣

に反応してしまふところが、まさに『生真面目すぎる』のだが……その辺にはどうも自覚が及んでいないらしい。

「もう少し気楽に生きてても罰は当たらないだろ。手を抜けるところは、適当でも良いと思うんだけどな」

「兄さんがそう言うなら……分かった」

「分かったって——」

「ちゃんと、適当に手を抜くように意識するね」

うん——と頷きながら、何やら決意を表明するかのような口調で言う朱乃。そんな妹を、明久は苦笑しながら眺め——

「……なんかもう既に矛盾しててるっぽいけどな」

「ええっ？　なんで？」

まあ、朱乃らしいといえぶらしいのだが。

更に他愛ない会話を重ねながら、二人は通い慣れた道を歩いて行く。

「あ。そうだ——兄さん」

ふと何か思いついた様子で朱乃は言った。

「夏休み。兄さんは何か予定入れてる？」

「アルバイトする予定」

「アルバイト？　どうして？」

不思議そうに朱乃が首を傾げる。

「どうしてって——」

「何か欲しいものとかあるの？」

「いやまあ、お金がどうこうって言うより、単にやつてみたいんだよ。社会経験としてさ」

と明久は肩を竦めた。

「ふうん……どんなアルバイト？」

「まあ普通にコンビニだけだよ。この際、みっちり働いてみようかなんて思ってる」

「うーん……」

朱乃は何か悩むように眉間に縦皺を刻んでいる。

「なんだ？　どうした？」

「ちょっと新しい服とか見に行きたいんだけど……」

一緒に行ってくれる時間ある？」



「それくらいは何とでもなるだろうけどな。しかし」

明久は溜め息をついて言った。

「そういうのは……彼氏とかと行くもんだろ」

「いないもん。知ってる癖に」

と上目遣いで明久を見つめながら、少し拗ねた口調で言う朱乃。

その真面目な言動のせいかな、よく同級生から教師から『大人びている』などと言われる朱乃のだが……妙に、幼く見える時があるのを明久は知っている。明久に言わせれば、むしろこちらが朱乃の『地』だった。

「いや、だからな……お前の場合、出来ないんじゃないやなくて、作らないからだろ。理想が高いのか何なのか知らないけどさ」

朱乃が学年を問わず、割と男子生徒に人気があるのは明久も知っている。何度か、同級生から紹介してくれないかと頼まれた事もあるくらいだ。

だが明久の知る限り、朱乃が誰か異性と付き合った事はない。

「だからブラコンだの何だの言われる訳だろ」

いつも明久と一緒に登下校している事に加えて、何度かあった男子生徒からの告白を全て退けて、事から……学校で朱乃は、そんな風に噂されているらしい。彼氏が出来れば、そんな噂もすぐに消えるだろうと明久は思うのだが――

「別にいいもん」

少し俯いて朱乃は言った。

「良かないだろ」

「――本当の事だもん」

「お前な……」

幼児の頃は『お兄ちゃんと結婚する』と言っても微笑ましいだけだが、さすがに思春期になってもその発言が変わらないとなると――色々と問題が出てくる。朱乃の身体の事がなければ、明久と一緒に登下校はしなかっただろう。

「兄妹っていつも」

朱乃は呟くように言った。

「半分だけだよ」

「……………」

言葉に詰まる明久。

実を言えば明久の家庭は少々複雑な事情があつて——彼と朱乃は父親は同じだが、母親は違う。要するに明久と朱乃は『腹違い』の兄妹なのである。朱乃の言う『半分』とはそういう意味だ。

だが——

「本当におまへは……」

変なところまで生真面目というか一本気である。

いい加減——自分達兄妹は、そろそろ兄離れ、妹離れすべきだろう。

万が一にも朱乃のブラコンが本気のそれになつてしまったのだとしても——現代日本の道徳観においてその先はない。許されない。

自分は藪を突いて蛇を出してしまつたらしい。

さてどうしたものか。

明久が溜め息をついた——その時。

「——？」

何処かで誰かが叫ぶ声が聞こえた。

単なる大声ではない。何か……ひどく切迫したような響きがその声にはあつた。

「なに？ 事故？」

「いや——どうだろう」

明久と朱乃は揃つて足を止めて辺りを見回す。

学校から歩いて十分余り……周囲には余裕のある敷地に幾つか、大きく、四角い箱のような建物が並んでいる。確か——大手企業の誘致活動を自治体が熱心に繰り返してきた結果、出来上がった工場地だと明久は聞いた事があつた。

工場といつても、かなり環境に配慮されたもので、不健康そうな雰囲気や、見る者を圧迫するような印象はない。どの建物も、白を基調に緑、青といった清潔感のある色で塗装され、周囲には適度な植樹

もなされ——景観的にはのどかにすら見える。

だが……

「——ッ！」

明久達から見えて一番近くの建物から——数人の男が転がるようにして飛び出してくる。

彼等の顔は一樣に、焦りと恐れで大きく歪んでいた。作業服らしきものを着ている事からして、工場の従業員なのだろう。

しかし一体何が？——と明久が怪訝に思いながら彼等を眺めていると。

「逃げろ、いや、伏せろ！」

男達の一人が、そう叫んで自らも倒れるように地面に伏せる。あまりの唐突さに意味が分からず、明久は朱乃と顔を見合わせて——

——轟音。

突如として工場から溢れ出た衝撃波と爆煙と

——そして大量の鋭利な破片は、無防備に突っ立っていた通りすがりの明久と朱乃を、容赦なく襲った。

第一章 戦乙女いくさおとめ

分かつている。

これは——夢だ。

『——お気の毒ですが』

『どうして、どうしてあの子達が……』

茫洋ぼうようとした意識の中で明久あきひさはそんなやりとりを聞いていた。

聞こえてくる声は——会話はひどく断片的で前後に脈絡みやくらくがない。恐らく時間や順番がばらばらになつてゐるのだろう。細部が曖昧あいまいな上に、話の流れが

素直すなおに繋がつなつてくれない。夢の中なのだから何の不思議もない事であつたが。

『工場じやうだんの管理会社側は賠償金額について示談の用意が——』

『お金なんかどうでもいいんです!』

『奥さん。何度も説明しましたが、現代の医学では息子むすこさんと娘さんの脳のうに突き刺さつてゐる破片を抜き取る事は出来ないんですよ』

しかし……それでも何度も何度も繰り返して聞いていると、断片が互いに噛かみ合つて、まるでパズルのように——ゆつくりとだが意味が繋がつていく事もある。おぼろげにだが話の輪郭りんかくが見えてくるのだ。夢であるが故ゆゑにか、思考は遅々ちぢとして巡らず……ほんの少し理解するだけでも、恐ろしく時間を要するのだが。

工場の爆発事故。

大量の死傷者。

そして――

『――最近、ようやく一般にも試みられるようになった技術ですが』

『人工冬眠？ それは、どれほどの……？』

『費用的には賠償金を充てれば、しばらくは問題ありません。国からの補助金も出ます。そもそもこの技術は、宇宙開発技術の一環として研究されてきたもので……完全自立型、メンテナンス・フリーや再生エネルギー利用による自給自足を目指して作られています』

『初期投資はともかく、維持費はたいした額にはありません。ただ――方法が方法ですので御家族の決断が必要になります』

『………決断、ですか』

『彼等を治療できる医療技術が完成するまで、五年かかるか十年かかるか。それまで彼等の新陳代謝

を、各種処置を用いて仮死状態にまで落とし、氷温――凍結しないぎりぎりの温度で保管します。あまり温度を下げると細胞が破壊されてしまうので――』

恐らく、話しているのは両親と医者なのだろう。あるいは弁護士や親戚の人間も混じっているのかもしれない。

『仮死状態……』

『ですから、彼等にとつては、目覚めてみれば、十年、二十年経っていた、などという場合もあり得ます。時間に取り残される、と言っても良いでしょう。浦島太郎のような状態ですよ。友人知人は勿論、御家族も……その間、年をとられる訳ですから――』

『……そんな』

声を詰まらせているのは母だろう。

明久とは血の繋がりは無いのだが、幼い頃から、まるで本当の母親のように彼を可愛がってくれた。忌み嫌つても当然な、愛人の遺した子を、自分の産んだ娘と分け隔てなく慈しんでくれた。

彼女の悲しげな声を聞くのは辛い。

本当に申し訳ない気持ちで一杯になる――

『でもそれなら助かる可能性があるんですね？』

『可能性、でしょうか？』

『なら……否も応もないじゃありませんか』

一体……現実ではどれだけの時間が経つたのだろうか。永遠とも言える微睡みの中では歳月の経過すら曖昧だ。

だが……

『これは驚いたな』

『幾つかの偶然が重なって——このような保存状態

になつていたようです』

『極移動もその「偶然」の一つか。奇跡だな』

『確かに……』

『治療は可能？』

『恐らく。ただ万全を期すならやはり能力的にも技術的にも相応の者を……』

『今となつては貴重な実物資料だ。是非生きたまま手に入りたい』

『了解——手配します。それまでは現状維持を』

時折——夢に妙な会話が混じるようになったのはいつ頃からだろうか。

いや。妙なのは会話だけではない。

脳裏に映る奇妙な光景。

白い壁に映るいくつもの人影——それは本当に人影なのか？

頭があつて、胴があつて、腕があつて、足があつて。基本的な輪郭は確かに人間のもののなのだろう。

だが時折、角度によるものか、そこに余計な何かが付いているようにも見えるのだ。

まるで悪魔のような尖り耳とか。

まるで鬼のような角状の突起とか。

あるいは獣のような——

あり得ない。

だからこれは夢なのだと分かる。

むしろ夢でなければ困る。

夢でなければ——……………

……………こんな無茶苦茶で無慈悲

な現実を、明久は受け入れられそうになかった。



まがた

瞼を開くと——やけに白い天井がそこにあつた。

天井なのだろう。恐らく。断言をはばかりるのは明久の前に——いや上にあるその平面が、見慣れぬものだったからだ。

照明器具がない。

なのに壁全体が柔らかく白く発光しているのだ。

眼を焼くような強さではなく、のつぺりとした光が染み渡るように降ってくる。

「……………？」

明久は眼を瞬かせる。

夢は、終わつた瞬間にはつきりそれと分かる。

世界はくつきりと描き出されて曖昧さが無い。五感に押し寄せるこの圧倒的な情報量が——眼を逸らす事を許さないかのような、暴力的なまでの明確さが『もう夢見る時間は終わったのだ』と告げてくる。そう。これが紛うかたなき現実なのだと。

「……………あ……………あ……………」

意識しないと声が出ない。

まるで長い間喋つていなかったかのように、一瞬、声の出し方が分からなかった。

いや。それだけではない。最初は、まるで首だけになったかのように、身体感覚がなかった。

改めて意識すると、全身の感覚がゆっくりと意識に繋がっていくのが分かる。試しに明久は右手の指を一本ずつ指を折りたたんで拳を造り、それを持ち上げて顔の前に持つてきた。

確かにある。身体は動く。

これは現実だ。

いつの間にか、明久は寝間着のようなものを着せられていた。薄青を基調としたものだが、あちらこちらに幾何学模様のようなものが印刷されている。

明久の私物ではないが、これは一体誰が用意して着せたものだろうか？

いや。そもそも――

「……ここ……は……？」

腹筋に力を込めて身体を起こしながら明久は呟いた。

自分はどうしてこんな場所で眠っていたのか？

そこは――何もない白い部屋だった。

天井のみならず、壁も床も、全てが何か白い素材

で覆われている。

染み一つない、完璧とも言うべき内装だ。

綺麗だが殺風景きわまりない。

そもそも窓も扉も見当たらないのだ。

となるとここは――牢獄の類なのだろうか？

明久が寝かされていたのもベッドというより、畳一畳ぐらいの面積を天板に持つ『箱』のようなもので、これもまた白い。家具というより、床のその部分だけがせり上がって出来ているようにも見えた。

手をついてみると、表面は微妙に柔らかい。やや硬めの低反発枕といった感じである。すると床も壁も皆、こんな感触なのだろうか。

「――朱乃？」

明久の記憶は妹と二人で下校中――の辺りで途切れている。彼女は、何処に行っただろうか。身体の弱い彼女の送り迎えは明久の役目だった。いつ発作が起きて倒れるかも分からない。だから折ある毎

にまず彼女の所在を確認するのが、明久にとっては癖くせになつてゐる。

だが――

「一体なんなんだ……これ」

改めて明久が呟つぶいた――その時。

遠雷えんらいのような轟音ごうおんが鼓膜こまくに触れた。

同時に強い振動が、床から明久の乗っている台を伝はつて這い上がってくる。

「なんだ？」

近くで何かの工事でもやっているのか。

そう思ったが、工事にしては音が――乱れている。断続だんじつ的だが、そこに一定のリズムはなく、ひたすら無秩序むちゅうじきな感じで音と振動が伝わってくるのだ。

散発さんぱつ的で、突発とつぱつ的で、そして、威嚇いかく的。

まるでそれは――戦場の銃声じゅうせいや爆音ばくおんのような。

次の瞬間……

「おわっ!!」

ひととき大きな音と揺れが明久を襲おそった。

思わず姿勢しせいを崩し、台から床の上に転がり落ちる。柔らかな床のお陰かげで、打撲だぶくの痛みは殆どほとんなかったが――衝撃しょうげきで一瞬だが意識が飛んだ。

「ぐっ……………」

深呼吸して五感を落ち着かせる。

改めて顔を上げた明久は――そこにぽっかりとあった孔あなを見た。

いや。孔というより……壁の一部が丸ごとなくなっていた。何か強大な力で抉えくり取られたかのように。

「何なんだ……？」

唐突な状況に、明久は戸惑とまどうしかない。

とりあえず此処ここは何処なのか――確認しようと彼は大きく開いた破壊孔へと近寄った。冷静に考えれば危険きけん極まりない行為なのだが、ただただ明久は訳が分からず混乱こんらんしていたのである。

彼の視界しかいを――異様いようなものが横切ったのは次の瞬間だった。

「――!？」

ぎりぎりとして思わず身を引く明久。

部屋の外にいるそれは――

「え？　なんだ？　む――」

あまりに巨大で。

あまりに異様で。

あまりに醜悪しゆうあく……………

「――虫!？」

それはそう呼ぶのが最も適当に思えた。

だがいわゆる『昆虫こんちゅう』とはまた印象が異なる。

いかにも外骨格がいこつかくといった感じの、硬そうな曲面と、

柔らかな曲面が混在しているのは同じだ。だが普通の昆虫にありそうな機能美――進化の必然とい

うか、合理性を追求した結果生じるような、ある種の機械にも通じる整合性が、その姿にはない。

それこそ、昆虫をばらばらに解体して、でたらめに繋ぎ直したかのような……混沌こんとんをその全身で表現しているような、異形いぎよう。

しかもそれが――明久の感覚が狂っているのではな

ければ、どう見ても、十メートルあまりの巨体で存在している。大型トレーラー並みの大きさだ。日常感覚の延長で――実感として理解できるぎりぎりの大きさ。

だからこそその異様さもその巨大さも、ひどく生々しく、現実的だった。

「……馬鹿な。こんな――」

こんな生き物がいる筈はずがない。

いや。そもそもこれは生き物なのか？

「……………」

明久は、怪物の周囲にも視線しせんを向ける。

見ればそこには奇妙な風景が広がっていた。

建物と覚おぼしきものはある。見渡す限りに幾つもの幾つも存在している。

だが……その輪郭の多くが、円柱状えんちゆうじょうであつたり、ドーム状であつたりで、全て何らかの丸みを帯びている。明久が見慣れた四角い建物もぼつりぼつりとして見受けられるが、明らかに少数だ。

建築様式そのものが、根本的に違う。

「——ッ！」

孔の向こうでざろりと瞳のない『眼』が——眼なのだろう、多分——明久の方を向く。

次の瞬間、鉄棒でも振り下ろすかのような動きで巨大な節肢が明久に向けて——明久のいる建物に向けて振り下ろされていた。

「うわっ!？」

次の瞬間、明久の視界に映る全てに、ものすごい勢いで亀裂が走っていく。

壁に。床に。そして天井に——淡く発光していたそれは断末魔のように明滅した。亀裂が瞬間に、蔓草の如く部屋の全てを覆い尽くし——そして部屋は、否、建物は丸ごと崩壊を始めた。

「おわああああああッ!？」

悲鳴を上げる明久。

彼にとつて幸いだつたのは……この白い見慣れぬ建材が、全て粒状になつて碎け散り、明久を押し

潰すような大きなものや、突き刺さるような鋭いものが何一つなかった事だ。

お陰で明久は瞬間的に砂利の山のような状態になつた建物の残骸の上を、粒まみれになりながら転がり落ちる事になった。

「ぶはっ!？」

途中、何とか立ち上がりとしては、足下がまた崩れ、彼は更に白い粒の上をごろごろと無様に転がって——それから地面に投げ出された。

「……………」

最悪の位置に。

建物を破壊した巨大な節肢のすぐ近く……手を伸ばせば触れられそうな距離だつた。

「うあ……」

全身から血の気が引いていくのが——まるで他人事のように——分かつた。

殺される。

どう考えても節肢の一撃で明久などべしゃんこだ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。